

修士論文（要旨）

2026 年 1 月

攻撃的ユーモア表出における受信者の意図推測と感情の生起について
—受信者の心理的ウェルビーイング（PWB）との関連に着目して—

指導 鈴木 平 教授

国際学研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム ポジティブ心理分野

224J2066

村井 萌杜香

Master's Thesis (Abstract)
January 2026

Recipient Intent Inference and Emotion Generation in Expressing
Aggressive Humor: Focusing on the Relationship with Recipient
Psychological Well-being (PWB)

Momoka Murai
224J2066

Master of Arts Program in Positive Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Taira Suzuki

目次

第1章 研究の背景	1
1.1 ユーモアとは	1
1.2 攻撃的ユーモアの発信者と受信者の間に生じるずれ	1
1.3 攻撃的ユーモアが心理的ウェルビーイング (PWB) に与える影響	2
1.4 攻撃的ユーモアの使用動機の推測	3
1.5 攻撃的ユーモアと関係性	3
1.6 攻撃的ユーモアと社会的スキル	3
第2章 目的と意義	5
2.1 目的	5
2.2 仮説	5
2.3 社会的意義	6
第3章 方法	6
3.1 回答者	6
3.2 調査時期	6
3.3 調査方法の概要	6
3.4 調査内容	7
3.5 分析方法	10
第4章 結果	10
4.1 基礎統計量	11
4.2 仮説の検証	19
第5章 考察	37
5.1 仮説1: ユーモア表出の動機の尺度と表情・関係性の関連	37
5.2 仮説2: 「不満伝達動機」と表情の関連	38
5.3 仮説3: 発信者への感情と表情の関連	38
5.4 仮説4: 「不満伝達動機」および発信者への感情と関係性との関連	39
5.5 仮説5: 発信者への感情とPWBおよびコミュニケーション・スキルの関連	39
5.6 仮説6: 対人関係におけるPWBとコミュニケーション・スキルの関連	41
5.7 その他の検証	41
第6章 まとめ	42
6.1 結論	42
6.2 今後の課題	42

引用文献

資料

要旨

問題と目的

ユーモアとは面白さや可笑しさなどの心的現象であり、駄洒落や皮肉などのユーモアを生起させる刺激事象をユーモア刺激という（上野，1993）。ユーモアには、思いやりや親切心から生じる内容から、攻撃的で嘲笑的な内容まで含まれる（石原，2015）。

特に、攻撃的ユーモアは、からかい、皮肉、あるいは冷やかしの他者への攻撃を内容に含むとされている（塚脇ら，2009）。また、対人場面において、攻撃的ユーモアの発信者と受信者の認識にずれが生じやすいことが明らかとなっている。本郷（2023a）は、発信者は攻撃的ユーモアを使用した自己の比較的敵意のない意図を手掛かりに被害結果を推測するのに対し、発信者の意図が分からない受信者は、被害結果としての自己の不快感情を手掛かりに、発信者の敵意ある意図を推測するため、結果として両者の判断や解釈に差が生じるとしている。このような性質を持つ攻撃的ユーモアは、発信者の心理的ウェルビーイング（PWB）を損なうユーモアコーピングであるとされる（本郷，2023b）。一方で、塚脇（2018）は、相手との親密度が高い場合に、攻撃度の低い攻撃的ユーモアは肯定的感情を生起させるというポジティブな対人的機能を持つといった、特定の条件下においてであれば、攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能をもつ可能性を初めて示したことを述べている。

このように、攻撃的ユーモアの使用において、発信者の動機や意図、それに対する受信者の推測が、受信者の対人的機能についての感情の生起に影響を及ぼすということや、発信者の PWB を損なうユーモアコーピングであるということが、先行研究で示唆されている。しかし、受信者の意図推測に影響を与える親密度や感情についての要因の検討が不十分であることや、表情などの非言語的な手がかり含めた攻撃的ユーモアの対人的機能の検討の必要性についての指摘がされている（本郷，2023a，塚脇，2018）。加えて、攻撃的ユーモアは立場の弱い者やマイノリティに向けられることや、上下関係が発生する状況においては、被害者が一貫して攻撃的ユーモアの対象となることが指摘されている（牧野，2007，Keltner et al.，1998）。こうしたことから、攻撃的ユーモアは、対等な関係のもとで使用される場合に比べて、上下関係において使用される場合の方が、受信者にネガティブな影響を及ぼすと考えられる。

また、牧野（1997）や阿部・仁平（2014）は、攻撃的ユーモアと社会的スキルとの関連を検討したが、有意な相関関係が見られなかったとしている。しかしながら、阿部・仁平（2014）の調査対象者が、大学の女子生徒のみであったことや、用いられた「攻撃的ユーモア感知因子」で受信者の立場ではなく、第三者目線での攻撃的ユーモアに対する印象を扱っていたことから、調査対象者に男子を加え、攻撃的ユーモアの受信者の、攻撃的ユーモアを受信した際の感情に焦点を当て、社会的スキルとの関連性について着目することとした。

さらに、鈴木・木野（2015）では、社会的スキルが高いだけでなく、他者指向的に共感するとともに、自己指向的に共感しないことが自身のウェルビーイングを維持するためには重要であると示唆された。そこで、本研究では、攻撃的ユーモアの受信者の社会的スキルと対人関係における心理的ウェルビーイング（PWB）との関連性について着目した。

そこで本研究は、攻撃的ユーモアの受信者に着目し、①発信者の笑顔の有無が受信者の

意図推測に及ぼす影響，②受信者の，発信者に対する意図推測が受信者の感情の生起に及ぼす影響，③発信者との関係性が受信者の意図推測や感情の生起に与える影響，④受信者の，対人関係における PWB とコミュニケーション・スキル（ENDCOREs）と感情の生起との関連性，⑤対人関係における PWB と社会的スキルの「他者受容」との関連性について検討することを目的とした。

方法

都内 A 大学の大学生 176 名（対等群 81 名、上下群 95 名）を対象に質問紙調査を実施した。塚脇（2018）を参考にした場面設定を提示し，質問への回答を求めた。関係性については，調査参加者を無作為に「対等群」「上下群」に振り分け，発信者の表情を「笑いながら」と「表情を変えずに」の 2 パターンを提示した。測定尺度として，「ユーモアの動機の尺度（塚脇ら，2009b）」，「意図推測の手がかり」，「A に対する感情」，「関係継続意思」，「笑顔のイメージ」，「心理的ウェルビーイング尺度短縮版(PWBS)（岩野ら，2015）」，「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs（藤本ら，2007）」を用いた。

結果

攻撃的ユーモアの発信者の表情の違いは，受信者の意図推測や感情の生起に影響を及ぼすことが明らかとなった。攻撃的ユーモアの発信者に“笑顔”という手がかりがあることによって，受信者が発信者の意図をより親和的なものとして捉えたり，よりポジティブな感情を抱く傾向にあることが示唆された。しかしながら，攻撃的ユーモアの発信者との関係性の違いによる受信者の意図推測や感情の生起への影響は，ほとんど見受けられなかった。

また，対人関係における PWB の得点が高いと，攻撃的ユーモアの発信者に対する受信者の感情は，よりポジティブなものになることが明らかとなった。一方で，攻撃的ユーモアの発信者に対する受信者の感情と社会的スキルの「反応系」の因子とは関連性がほとんど見受けられなかったことや，対人関係における PWB の得点が高いと社会的スキルの「他者受容」の得点が高くなるという結果がみられた。

考察

分析の結果から，攻撃的ユーモアの受信者において，発信者の表情の違いや対人関係における PWB の得点が，発信者への意図推測や感情の生起に差を生じさせたという点では仮説を支持したが，発信者との関係性や社会的スキルの「反応系」の因子は感情の生起に差を生じさせなかったという点では仮説を支持しなかった。

本研究は，攻撃的ユーモアの受信者の意図推測や感情に与える影響について，表情・関係性・PWB・社会的スキルの観点から検討を行った。こうした研究は，いじめやハラスメントの発生リスクやそれによる被害についての理解を深め、問題の予防や対処につながることを期待される。

引用文献

- 阿部洋子・仁平舞 (2014). <教育と調査> ユーモアと笑いの意味の再検討—ユーモア行動 (表出・感知) と社会的スキルとの関係を参考にして—, コミュニケーション文化, 8, 107-120.
- Drew, P (1987). Po-faced receipts of teases.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15(3), 347-361.
- 本郷亜維子 (2023a). 攻撃的ユーモアの対人的機能に関する研究動向と課題—ユーモアの発信者と受信者という「立場」の観点から— 放送大学文化科学研究, 2, 218-226.
- 本郷亜維子 (2023b). 《研究ノート》 心理的ウェルビーイングに対するユーモアコーピングの効果 ユーモアの機能と対処方略の関係 笑い学研究, 30, 63-80.
- 石原俊一 (2015). 対人ストレスユーモアコーピングにおける心理学的健康への効果 人間科学研究, 36, 67-77.
- 岩野卓・新川広樹・青木俊太郎・門田竜乃輔・堀内聡・坂野雄二 (2015). 心理的ウェルビーイング尺度短縮版の開発 行動科学, 54(1), 9-21.
- Keltner, D., Young, R. C., Heerey, E. A., Oemig, C., & Monarch, N. D. (1998). Teasing in hierarchical and intimate relations. Journal of Personality and Social Psychology, 75, 1231-1247.
- 横浜放送局 かながわ情報羅針盤 (2024). 横浜市の中学生がいじめで自殺 第三者委員会の調査結果【詳報】 Retrieved March 29, 2025, from <https://www.nhk.or.jp/shutoken/yokohama/article/019/56/>
- 牧野 幸志 (2007). ユーモア 岡本 真一郎(編) ことばのコミュニケーション—対人関係のレトリック— ナカニシヤ出版, 117-140.
- 宮戸美樹・上野行良 (1996). ユーモアの支援的効果の検討 支援的ユーモア志向尺度の構成 心理学研究, 67(4), 270-277.
- 文部科学省 (2024). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 Retrieved March 29, 2025, from https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf
- 篠原一光・三浦麻子 (1999). WWW 掲示板を用いた電子コミュニティ形成過程に関する研究 (<特集> ネットワーキングの社会心理学) 社会心理学研究, 14(3), 144-154.
- 鈴木有美・木野和代 (2015). 社会的スキルおよび共感反応の指向性からみた大学生のウェルビーイング 実験社会心理学研究, 54(2), 125-133.
- 塚脇涼太・樋口匡貴・深田博己 (2009a). ユーモア表出と自己受容, 攻撃性, 愛他性との関係 心理学研究, 80(4), 339-344.
- 塚脇涼太・越良子・樋口匡貴・深田博己 (2009b). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか?—— ユーモア表出動機の検討—— 心理学研究, 80(5), 397-404.
- 塚脇涼太 (2018). 攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか:相手との新密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討 対人コミュニケーション研究, (6), 13-28.
- 上野行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7(2), 112-120.
- 宮戸美樹・上野行良 (1996). ユーモアの支援的効果の検討 支援的ユーモア志向尺度の

構成 心理学研究, 67(4), 270-277.

吉田 昂平 (2012). 日本語版ユーモアスタイル質問紙の作成 笑い学研究, 19, 56-66.